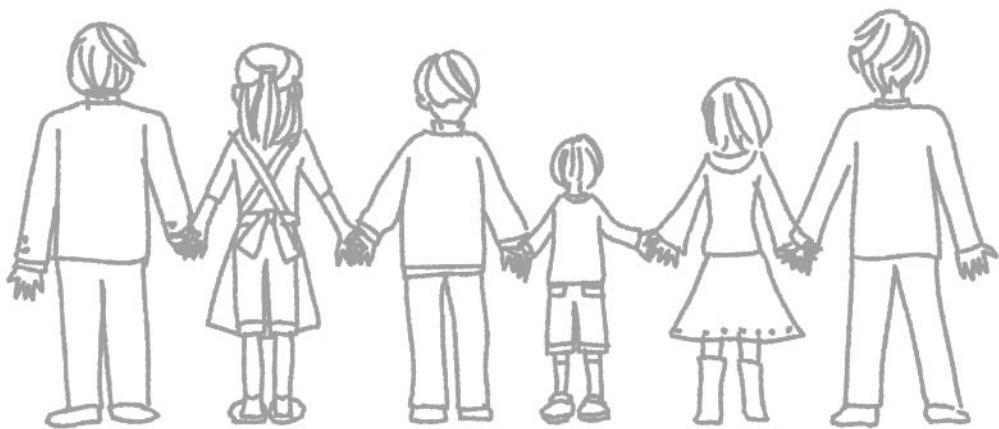




# みんなの「居場所」を考える

## 報告書



2016年11月／発行：「みんなの居場所を考える勉強会」実行委員会  
協力：静岡県立大学COC事業 「ふじのくに」みらい共育センター・牧之原みらい交流サテライト

## 牧之原市の子育て支援及び児童相談支援の現状について

牧之原市 健康福祉部長 大石 朗

最初に、牧之原市の子どもの状況についてお話しします。

現在の歳児別の人口を見ると、高校生は1学年400人以上で、中学生から3歳児までは1学年400人前後ですが、2歳児は342人、1歳児は330人、0歳児は319人と急激に減少しています。これは、東日本大震災の津波以降、若い人を中心に牧之原市から人口が流出しているためと考えられます。

参考に、歳児別の人口で最も多いのは何歳だと思いますか。一番多いのは66～68歳の団塊の世代と言われる人達で、1歳当たり850人前後と18歳以下の約2倍となっています。

次に、幼稚園及び保育園の入所状況を見ると、保育園の0、1、2歳児はそれぞれ増加しています。少子化で子どもの歳児別人口は減少していますが、保育園に預けるお母さんの人数は増加しています。

一方、幼稚園と保育園を合せた3、4、5歳児の園児数は少子化で当然減少していますが、内訳をみると、保育園の3、4、5歳児は少し増加している一方で、幼稚園の3、4、5歳児が大きく減少しています。

次に、放課後児童クラブの登録人数を見ると、これまで3年生までの利用であったものを今年から6年生まで利用可能としましたが、1、2年生の登録率が高く、学年が上がるにつれて登録率が低くなる状況はこれまでと変わりありません。なお、4年生は3年生からの継続利用により15.2%の登録がありましたが、5、6年生は一度中断しているため本年度は極めて少数の登録がありました。来年度は5年生、再来年度は6年生が継続利用となるため、少しづつ増加するのではないかと考えますが、基本的には高学年になると塾やスポーツなどで児童クラブの人数は減少していきます。

なお、学校別の児童クラブの登録人数を見ると、市街地の小学校よりも郊外の小学校の方が高くなっています。市街地の小学校ほど共稼ぎで児童クラブの利用が高いイメージですが、この原因は不明です。

次に、子どもの貧困率等についてです。

子どもの貧困率は、平均的な所得の半分以下の所得で暮らす子どもの率という事で、全国の貧困率は平成24年現在で16.3%となっています。しかし、子どもの貧困率は、都道府県や市町村ごとの数値が公表されないため、経済的困難を示すいくつかの数値を利用して、市町村ごとの状況を推測することとしており、中でも、全国の就学援助受給率が子どもの貧困率の国の数値に近いため、市町村ごとの就学援助受給率で子どもの貧困率を推測する事が多くあります。

牧之原市は、就学援助受給率や生活保護世帯の子どもの率は全国平均を大きく下回っていますが、児童扶養手当受給率は全国平均を若干上回っています。

最後に、児童相談の状況についてですが、児童虐待については保健センターや幼・保育園、小学校等から体のキズなどで連絡が来ることが多く、家庭からは子どもの障害や不登校などの相談が多くなっています。それぞれの相談について1年で解決する事は少なく、継続指導となる件数が多くなっています。

児童虐待の事例を紹介します。ある小学校で給食を非常によく食べる子が居まして、聞いてみると「1日1食、給食だけが食事で、朝食と夕食を食べさせてもらえない。お腹がすいて近所のごみ箱の残飯を食べる事もある。」という事で、これはアフリカかどこかの国の話ではありません。牧之原市内で実際にあった話です。しかし、調べてみると、確かに低所得の家庭ですがお金がまったく無いという事ではなく、母親が能力不足で食事を作れない、お金が有る間はコンビニ弁当でお金を使ってしまい、月の後半はお金が無くなってしまうという事でした。

以上、何かの参考になればという事で、お話をさせて頂きました。

# 子どもとの関わり方

元養護教諭 飯田 賀代

養護教諭は学校の保健室に在室しています。保健室は、子どもたちの健康診断や健康管理、保健指導、その他、健康に関する執務をしています。

けがや病気の応急処置もします。このような子ども達へ適切な処置をするには、日頃から子どもの健康状態を把握しておく必要があります。生徒健康調査票、健康診断の結果、日常の学校生活や家庭生活の様子などから、一人ひとりの子どもの情報を集約しておきます。

また、近年の保健室は、怪我や病気の応急処置の他に、心が弱っていたり、痛んでいる子の「居場所」として機能することも求められています。心が弱っている、痛んでいる理由は複雑で、1度や2度の来室ではわからないことが殆どです。

心の痛みでも、最初は身体症状の訴えで来室します。まずは、身体症状の処置をし、回を重ねて来室してくる子どもには、時間と場所を提供して対応していきます。

## 実例1 Kとの関わり 中学3年男子 状態：反社会的行動

Kの目の打撲がひどかったとき、救急対応として冷却をして一日ベッドに休ませた。このようなことは通常は行わないがKには特別な対応をした。ただし、他の生徒同様に保健室でのルールを守ることは約束させた。Kには特別な対応をすることが多く、給食の箸を用意したことそのひとつである。Kの劣悪な家庭環境を知っていることを本人に伝えた。Kのことをいつも気に留めているというメッセージを送りながら先生方にKの対応の共通理解をはかった。

## 実例2 Aとの関わり 中学2年女子 状態：2年間保健室登校 診断：知的障害

保健室登校を始めてまもなく、Aはベッド周りのカーテンを引き他の人を遮断し、一日中ベッドで生活するようになった。カーテンの中からAが話すことに耳を傾け、Aが自分からカーテンを開け出でてくるのを待った。2ヵ月程たってAは自分から出てきた。それからAは誰にも話したことがなかった家庭で起きた事件のことを一気に話した。「やっと話すことができた」と言ったAには話を聞き出そうとしないで、待つ姿勢で対応した。

## 実例3 Mとの関わり 中学1年女子 状態：3年間保健室登校 診断：解離性障害

学校へ送って来た母の車の中で逃げ回るMに声をかけ、保健室を安心できる場所と案内し、Mの居場所と理解させ寄り添う対応に心がけた。部屋の隅で固まったり、校舎から急に飛び出してしまう等、混乱して特異な行動が多くあったMへの職員の共通理解を図り、担任を含め何人かの職員で対応し保健室以外の場所もつくり、Mに安全な学校生活ができるようにした。

### キーワード

- ・見守りをする。
- ・話を聞いてくれる人になる。

# 放課後児童支援活動から考える子どもの「居場所」

児童館嘱託職員 片瀬 紀子

## ○学童保育（放課後児童クラブ）はどういうところなのか

・小学校区の異年齢の子どもの居場所

共働き、一人親家庭等の小学生を預かり、保護者の仕事を支援する。

牧之原市は市で運営。子ども子育て課が管轄。

現在11ヶ所（夏休みは13ヶ所開設、坂部は有志、ボランティア等で運営）。

運営はクラブ毎に任せられている。

支援員（認定資格研修の受講終了者）、指導員（牧之原市は補助員）どちらも嘱託職員。

他市町では委託（社協）、民間（静岡市は静鉄→送迎等）もある。

児童福祉法の改正により、対象年齢「おおむね10歳」から「小学生」に。→長期休暇の利用のみ

夏休みが始まり、受け入れが一日体制に。（牧之原市は7:30～18:00）

どの子も「働く家庭の子」なりのしんどさ、寂しさを持っている。

目の前の子ども達が表現する行動や言葉の裏にある思いを受け止めていく。

暴言を吐く子、配慮を必要とする子等。

信頼関係の大切さ

お迎え時に、短時間にその日の様子やあった出来事、その子の何気なく発した思い等を伝える。

保護者も子どもも気持ちよく帰宅してもらうように。

## ○児童館はどういうところなのか

・異年齢の子どもの居場所（0歳～18歳高校生）

小学生、乳幼児親子の利用が多い。

未就学児は保護者と来館。保護者の育児相談等もある。

→市の専門機関（子育て支援センター、家庭児童相談員等）と連携を取っている。

牧之原市は2館（相良児童館、榛原児童館）

小学生や乳幼児対象の事業（教室）、子育て支援（サークル活動、サロン等）の事務局

居場所として・見守りの必要性

誰か友だちが児童館にいる…と思って来る子

夏休み、土日にお弁当持参で一人で来る子（おにぎりを自分で用意して）

自転車等使ってでも自分で来れる子はいいが…来られない子はどう過ごしているのか。

## ○子どもの関わりを広げていくには・・地域との関わり

学校区に歩いて行ける居場所があれば・（児童館だけでは難しい。限界がある。）

「見守ってくれている地域の大人がいる」のがわかるだけでも違うと感じている。

## ● 第二部 ワールドカフェ 知って・感じて・ともに考える「あなたの居場所って？」で出た意見

第二部のワールドカフェでは、3つの問い合わせ順にたて、居場所について参加者が一緒に考えてきました。

それぞれの生活体験や第一部の話題を元に、居場所について話がはずみ、語られたのです。

テーブルの上の紙に自由に書き留められたコトバの一部を再録します。

### 〈問1〉

「私にとっての居場所とは……!?」

居心地の良い場所。楽に居られるところ。  
一番落ち着くところ。仕事場。

長く考えられるところ → 自分が自分らしくいられるところ。

どこか普段（家・会社・スーパー）とは違う場所でおしゃべりができたらな!!!

「家」以外の場所をあちこちに欲しい。

家の「外」の人間関係に求めるものがある  
→受け止めてもらえる場所→安心できる場所

子どもの居場所、大人の居場所、両方必要。  
地域に帰って来られる場所を！

子ども～高校生～老人まで、いろいろな居場所が必要で、選択肢のある点が大切。

コミュニティがバラバラになって仲間作りが難しいので、古民家で集まる!!!

場所（というハコ）ではなく、人間関係。  
受け止めてもらえるところ。

若者には、コミュニケーションの道具であるパソコンやスマートホンが使える点も大事。

いろんな人が関わって、「解決策」をみつけていくところ。

里山（自然を見ていると気分が良くなる）

「逃げ場所」＝「どうしたらいい？」と受け止めて、楽しく、支援につながる場所。

### 〈問2〉

「こんな場所は、居場所じゃないな。嫌だな……」

悪口ばかりが聞こえてくるところ。（“ぐち”を言えるところは、良い居場所だが……）

敷居が高い、難しい固い話ばかりが出るところ。

（使用時間の上限などの）制限や強制、指示、命令のあるところ。

自分と価値観や志が違う人がいっぱいいるところ。

気を使うところ。（仕事でエネルギーを取られるので、居場所では気を使いたくない）

否定されるところ。プライベートを聞かれるところ。差別やいじめ、うわさ話があるところ。

人の話を聞いてくれないところ。必要とされないところ。

スマートホンを一人だけでやっている人が多いところ。

友達や知り合いが居ないなど、「つながり」が無いところは、居心地が悪い。

〈問3〉 最後に「私たちにとって、良い居場所とは……」について、条件や大事にしたいことを話し合い、8つのグループか



第二部のワークショップで出てきた居場所で大事にしたいポイント

ら1つずつに絞って出していただきました。

(a) 次につながる「楽しい場所」

(b) 「市（いち）」に行きたくなる。交流ができる。（農家・子ども・情報交換など）

(c) 共通の話題を気楽に気楽に話せる。

(d) 行ってみたいなと思える場所。互いを思いやる。

(e) 「何をしたか？」が共通で理解できている場所。

(f) 高齢者や子ども、若い人も集まれる場所が、海の見えるところや、里山、空き家にあると良い。

(g) 年齢・立場に関係なく、集まって気楽におしゃべり。

(h) 「自己肯定感」 役割・出番・本人の受け止め・使命感・達成感

## 津富宏先生（静岡県立大学国際関係学部）のコメント

津富先生は、多くの学生サークルや、若者の就労支援を行うNPOや、地域のレジリエンス（震災が来てもしなやかに立ち上ること）を高める団体を立ち上げてきた経験から、「みんなの居場所」についてコメントされた。

まず、「建物」ではなく、「地域」を居場所にする。たとえば、スウェーデンのユースセンター（若者の余暇活動施設）は「若者の基地」として、そこへ通う若者たちが地域に参加するためのプロジェクトをいろいろと仕掛けている。建物ではなく、地域を居場所と感じられれば、私たちはどこにいても幸せである。

次に、複数の居場所をつなぎあわせる。私たちの困りごと（育児、介護、貧困、就労などなど）は相互に連関している。よって、その困りごとの支援を提供するさまざまな居場所もひとつの生態系としてつながりあうことによって幸せな地域ができる。その際、大切にしたいのは、困りごとに「ほちほち」とつきあえる文化を地域につくりだすこと。問題を抱えすぎず、人として、「友だち」として、出会うこと。

そして、最後に、居場所づくりに関する三つの考え方を紹介された。

①子ども食堂をつくるに当たって、子ども食堂を地域の一部としてデザインする（石巻TEDICの門馬さん）

②困りごとに解くにあたっては、ふたつの「そうぞうりょく」、すなわち、想像力と創造力が大切である（法政大学の湯浅さん）

③「中世の大聖堂は、現代の図書館になった」と、人としての幸福 Well-beingを高める場を中心とするまちづくりを進めた（前ボゴタ市長のエンリケ・ペニヤロサさん）

（文責：東 宏乃）



## みんなの「居場所」を考えるに参加して

中島 佑実

### 第1部：現場からの話題：「みえない実態を知る」

1 牧之原市の子育て支援及び児童相談支援の現状（市役所健康福祉部） 大石 朗氏

2 元養護教諭から学ぶ子どもとの関わり方 飯田 賀代氏

3 放課後児童支援活動から考える子どもの「居場所」 片瀬 紀子氏

コメント：「居場所づくりについて思うこと」（静岡県立大学） 津富 宏氏

第1部では、様々な角度から牧之原市内の実態について話を聞くことができた。

大石氏は、数字を用いて現状について紹介してくださいました。子どもたちの人口が近年減ったことを市役所の人たちが口をそろえて言っていたが、統計的に目で見るとはっきりわかった。また、幼稚園より保育園が選ばれていることは、「女性（母親）の就労」がメディアでも言われている通り、牧之原の母親の間でもそうであることが実感できた。放課後児童クラブの学校別の登録率が市街地よりも郊外の方が多いのは、近所に人が少ないと感じる。人口密度から考えても、親が仕事で家にいないのに近所にも遊べる友達が少ないとなると、学童に入れようと考える親心はよくわかる。

長年、養護教諭をされていた飯田氏の話の中では、「子どもとの関わりを切れないようにした。」といっていた言葉がとても印象的だった。保健室は怪我の手当てをするだけでなく、通学はしているが何かの理由で不安を感じている児童、生徒にとっての居場所になっているのだと改めて考えさせられた。当時学生だった私の記憶にも「保健室登校」をしている子がいたので、その支援が今の時代も変わらないことに少し安心した。事例にあげ紹介した子どもたちは、中学生になっても親との見えない絆が逆に子どもを縛りつけてしまっていて、そっと手を差し伸べることのできる第3者の存在の大切さを感じることができた。

今まさに日々の子どもたちと向き合っておられる片瀬氏は、学童保育、児童館という現場の視点から話をして下さった。学童保育の「異年齢の難しさ」や「現場を担う職員不足の問題」を説明し、児童館に「自分で作ったおにぎりを持って来た子」や「自転車でも来れない遠方に住んでいる子への思い」から多くの子どもたちのことまで気遣っている片瀬氏の優しさを感じることができた。「地域ぐるみで、子どもたちの生活を支えていければいいなあ。」と私も思った。

津富氏の「居場所はいらない。」との発言は、初めて話を聞いた私としては驚いた。ただ、「閉じられた空間ではなく、通り過ぎていく通過点であればいい。」と考えることは、居場所づくりを担っていく人たちにとって1つの大切な視点なのかもしれない。ただ、そう考えるためには、自分たちだけではない誰かも、別の誰かの居場所づくりと一緒に支えていく事が必要だと思う。悩みを“一人で抱え込まない”という姿勢は大事だと思う。

### 第2部：知って・感じて・ともに考える：「あなたの「居場所」って？」 東 宏乃氏

「自分にとって居心地の良い場所とは？」「居場所にしたくない居場所とは？」「居場所にとって大事な事とは？」と1回1つの質問で、ワールドカフェ形式で8班に分かれてトークをした。私は、住人になり他のテーブルへ旅に出ることはなかったが、その場に残り来てくれた人たちの話を聞いた。

そんな中、「すでに居場所を地域に提供しているのではないか？」と思った方がいたので、話を聞かせてもらつた。“以前から趣味でやっていたクラフトを、講師や仲間に声を掛け、近所の公民館で行うようにした。月に1度、常時20人程度が集まっている。どなたでも参加できるが、準備等があるので事前に出欠を取っている・・・。”と偶然始まった輪が2年もつづいていると聞き、とても関心した。ワールドカフェの最後に、問3の答えを青い紙に書きグループごとに黒板に貼っていましたが、その中でも特に「何をしたいか、共通で理解できている場所」「次につながる楽しい場所」というのがとても心に残っている。1ヶ所でも多くこの牧之原市内にできていくといいと思う。

最後に私自身、牧之原市内の認定子ども園で保育教諭として働いているため、毎年多くの子どもと関わっている。子どものみならず、母親との関係性1つとっても「多様になってきているなあ。」と感じている。一人ひとり性格の違う子どもたちがいて、様々な親子がいる。それはきっといろいろな家族があって、もっと無数の生活スタイルがそこにあることを示しているのだと思う。また私自身、2児の母親だ。核家族のため、上の子は小学校の後学童クラブに通い、下の子も長時間保育を利用して保育園で預かってもらっている。今年の5月、知り合いから、「焼津市では新たに居場所づくりをした所に助成金を渡すという制度が始動する。」と聞いたことを思い出した。様々な考え方や背景を背負った人たちが生活している今日、牧之原市ではどのように「居場所づくり」が形になっていくのか皆さんと考えていけたらいいと思った。静岡県全体で見てもそだが、人口流出が止まらない中、人ととの繋がりを強化することは確かに大事なことだと思う。

「居場所」について考えるいい1日になった。今回のために、いろいろとご尽力してくださった方々ありがとうございました。

## 居場所のあり方を考える

みらい子育てネット牧之原 代表 澤島 千温

現代の子どもたちの中には、学校や家庭に居場所がないのかなと感じることがあります。「いじめ」「不登校」「家庭の経済格差」「虐待」など、子育て中の問題が、私たちの「まち」にも存在していることは事実です。「居場所がある」とは、単なる場所や所属があるということだけではありません。その人にとって居心地の良い場所があるかということが重要なことです。人は、どんな時に心地よいと感じるのでしょうか?人に受け入れられ、認められ、そして必要とされることだと思います。このことが、居場所には大切だと感じます。まして、大好きな家族や人から認められると、とても幸せな気持ちになるでしょう。それは、子どもも大人も同じだと思います。今ある学校や家庭が、子どもたちにとって心地の良い場所にならいいのにと思う期待もあります。しかし、家族構成や、世帯の経済力、大きな組織における環境など、改善が難しいことも多々あることが現実です。私は、とても複雑な心境を抱えていました。地域団体として、家庭や学校以外に居場所の提供が私たち地域にも必要なではなかと考え始めました。

いざ、その「居場所をつくる」となると、目的はさまざまに考えるメンバーが存在することがわかりました。「居場所づくり」と一言でいっても、地域交流、世代間交流、貧困対策、学習支援等想いは様々です。スタートするには、この思いの共有と共通理解が必要なのではないか?と立ち止まりました。そして、その想いを一致させて、内容的には同じようにそろえた居場所の提供をしなければならないと考えました。さらに、子どもたちが自由に来られる場所となると小学校地区に一つ造っていくのが理想ではないかと思い始めました。そうして、私の考えは、固くなりました。実現は、非常に難しいとさえ感じました。必要だと感じているのに、実現できないもどかしさを抱えたまま、今回のワークショップ「みんなの居場所を考える」に参加しました。

今回、津富先生が講話の中で発言された、「居場所はいらない」ということばに大変驚きました。先生が伝えたることは、今ある居場所がつながることが重要であるということを意味していました。ショックでしたが、私のこり固まった考えにとっては、大きな転機となりました。まずは、地域にある居場所を発掘し、そしてつながり合うことから始めてみたいと思います。そして、「いろんな目的をもった居場所があってもいい!」自由な発想に、その通りだと共感しました。人々が持つ性格も好みも強みも人それぞれです。心地いいと感じることも人それぞれなのです。ですから、いろんな居場所があって良いのだと思えました。「居場所」に必要なことは、参加者の自由選択、自己決定だと考えます。それこそが認められるということで、それが重要なのだと思えました。

人々の多様性を認めていくには、居場所にも多様性があることが望ましい姿だと今想像できます。そして、支援する側、される側ではなく、人が集まりつながり合っていきたいと思います。自分のできることを必要とされる場は、支援するという立場にいても、それによって喜びを感じます。支援者側も支援する場は、自己実現をする場なのです。人は人によって傷つきますが、人は人々の存在する環境で満たされていきます。肩肘を貼らずに、目の前の課題に直面して考えていきたいです。自分たちのできるサイズのことから、各々から始めていけたらよいと思います。

「いつ來てもいいよ。」「待っているよ。」そして、旅立ちを笑顔で「またおいで。」と見送れる居場所が地域にあふれることを願います。大人も子どもの関係なくつながり合っていきたいです。

私たち、市民が行動することによって、家庭・学校・地域との更なる連携の充実につながると信じています。心地よく幸せを感じ生活できる地域を、みんなで実現していけたらと思います。

H28.7.31 みんなの「居場所」を考える

## 困りごとを乗り越えていける大人の居場所を

横田 多門

「居場所」の勉強会は、子どもの貧困や子育て支援という観点から開催された会だと思うので、子どもの「居場所」が中心的な話題になるのは当たり前だと思うのですが、大人の居場所について考えることも必要だと思います。その意味でこの勉強会のタイトルが「みんなの『居場所』を考える」となっていたところがよいと思いました。主催者の配慮でしょうか。

元教員の私ですので、地域の皆さんが子どものことについて様々な所で話題にしてくださるのは有り難いと思いますし、子どもこそが地域の将来を担う“宝物”ですから、地域づくりに子育て支援の観点は欠かせません。ただ、私は、最近の様々な地域づくりプロジェクトがあまりにも子どもを対象にしたものに偏り過ぎているのではないかと思うのです。子どもは大人を見て育ちます。自分の周りの大人が生き生きと生活していれば、自分もそのようになろうとします。大人たちが立派なら子どもたちもそれを目指します。ですから、「子どもたちのために」と考えると同時にそれを囲む「大人たちのため」を考えたいと思います。大人（親）の「居場所」が確実に確保されている地域でありたいと思います。

「居場所」の勉強会に参加した数日後、まだ駆け出しの「保護司」として更生保護施設の実態について学ぶ機会がありました。非行や犯罪で処分を受けた人たちを一定期間保護して、宿泊場所や食事を提供するとともに必要な生活指導を行って社会復帰を支援する施設です。本来なら頼るべき親族等がいない人が身を寄せ、ここを拠点として毎日仕事等に出かけて行き、門限までに帰ってきます。世間の「白い目」や荒波に耐えながら自立を目指してがんばっている人たちにとっては、まさに港のような場所が更生保護施設です。

「居場所」の勉強会で津富宏先生が話されていた「居場所は“飛び立つ場所”（巣）でありたい」というのはこれかなと思いました。更生保護施設は全国にあり、県内にも2カ所ありますが、いずれの施設も決して「閉じられた場所」ではなく、更正保護協会や協力雇用主等の更正保護関係団体と連携して入所者を支援しています。また、施設周りの環境整備作業などの地域貢献活動も計画的に実施し、地域との交流を図っているそうです。

犯罪をした人ほどではないけれども、「困りごと」を抱えている人は数多くいます。そのような人たちが出会い、孤立することなく互いに支え合って「困りごと」を乗り越えて進んでいけるような場所が、あちらこちらにあるような地域でありたいと思いました。



第二部ワークショップ。ワールドカフェ方式でこんな居場所がいいなこんな居場所は嫌だな、を考える。

この報告書をご入り用の方や、  
「みんなの居場所」をめぐる活動に  
ご関心のある方は、お気軽に、  
下記にご連絡ください。（東）

静岡県立大学COC事業  
牧之原みらい交流サテライト

電 話：0548-23-0066  
FAX：0548-23-0069  
azuma.coc@u-shizuoka-ken.ac.jp